

英語の会話におけるイントネーションの役割

澤村香代子

1. 序論

英語のイントネーション（以下：イントネーション）の重要性は以前から認められてきてはいるが、イントネーション研究のアプローチは研究者によって分かれている。

イギリスにおける伝統的な研究では、心的態度機能が重要視されてきた。これは、話者と聞き手とのやりとりの中で、心的態度が知覚されやすいものだからである。O'Connor and Arnold (1973) はこの機能を重要視しており、音調の種類を細かく分け、分けた音調それぞれについて文タイプごとに考察し、心的態度を明示している。Pike (1945) や Crystal (1969) もこの機能を重要視している。

しかし最近では、心的態度が任意のものとして捉えられるようになってきた。Halliday (1967), Brown (1990), Ladd (1980), Tench (1996) などは、情報を伝えることがイントネーションの働きの中心であるとし、心的態度は必要な時に付加されるものであると捉えている。この中で注目すべきことは、Halliday (1967) はイントネーションが発話の意味に関わるものであるとしたことである。Halliday は発話の意味を変えるものとして、tonality (以下：トナリティ), tonicity (以下：トニシティ), tones (以下：トーンズ) の3つのカテゴリーをあげた。トナリティは音調群の境界をどこに設定するかということ、トニシティは核音節をどこにするかということ、ト

ーンズはどのような核音調を選択するかということである。こうしたアプローチは、発話の意味に関わるという点で、心的態度中心のアプローチよりも明確であるといえる。

本稿では、後者のアプローチをもとに、発話を分析し、実際の発話ではどのような現象が起き、話者がどのような意図でそういった発話をしているのかを Tench (1996) の理論をもとに解釈しながら見ていく。解釈することにより、会話中でのイントネーションの役割に関する一考察を示したい。次に、分析で使用する Tench (1996) の理論を簡単に示しておく。

2. Tench の理論

Tench (1996) は Halliday (1967) のアプローチをもとにさらに研究を進めた。トナリティ、トニシティ、トーンズが発話の意味にどのように関わっているのかということ述べ、トーンズでは話者と聞き手の関係性を表す音調として下降調と上昇調をあげた。下降調は話者主体の音調であり、上昇調は聞き手主体の音調であるというものである。この話者主体の音調を dominance (以下：ドミナンス) とし、聞き手主体の音調を deference (以下：デファランス) とした。以下で Tench (1996) の理論を紹介する。

2.1 音調群

音調群 (intonation unit) とは前頭部 (pre-head), 頭部 (head), 核 (tonic, nucleus), 尾部 (tail) から成る。前頭部は発話の最初の無強勢音節をいう。頭部は発話の最初に位置する強勢音節のことをいう。核は強勢音節とともに音調の変化が起こる音節のことで、尾部は核に続く音節のことをいう。発話によっては、前頭部、頭部、尾部はないこともあるⁱ。

尚、音調群は、ポーズで区切られたり、多くが文や節と一致したりするため、境界を知ることは比較的容易ではあるが、くだけた、速い発話では

その境界を知ることは難しい。そうした場合には、発話の内容を手がかりに見つけることもある。

2.2 トナリティによる情報の操作

トナリティは音調群の境界を設定する働きがある。Tench は音調群のことをイントネーション単位 (intonation unit) と呼んでいる。以下では音調群のことをイントネーション単位と呼ぶことにする。イントネーション単位が多くある発話は、話者が情報を多く伝えたい場合であり、少ない場合には話者の伝えたい情報が少ないということができる。通常、1つのイントネーション単位の中に1つの情報が含まれているとされ、多くのイントネーション単位は文レベルの節と一致するとされている。一致するものをニュートラルトナリティ (neutral tonality)ⁱⁱ といい、一致しないものをマークトナリティ (marked tonality)ⁱⁱⁱ という。また、トナリティによって発話の意味が変わってしまうこともある。次の発話を見てみる。

(1a) The man and the woman dressed in black | (then stood up)

(1b) The man | and the woman dressed in black | (then stood up)

(1c) The man and the woman | dressed in black | (then stood up)

(Tench, 1996: 41)

3つの発話は同じ語順であるが、トナリティによって3通りの発話となっている。(1a)は「黒い洋服を着たその男の人と女の人が(他の人は黒い服を着ていない)」という意味で、(1b)、(1c)は2つのイントネーション単位からなるが、(1b)は「その男の人と、黒い洋服を着た女の人が(男の人のほうはわからない)」となり、(1c)の発話は「その男の人と女の人ね、黒い洋服を着ていたのだけど」といったような意味になる。このようにトナリティによって情報が操作され、同じ語順の発話でも意味の違いがもたらされることもある。

2.3 トニシティによる情報の操作

トニシティは核をどこにするかということにより発話のポイントを示すものである。核は通常、イントネーション単位の最後のレキシカルアイテム (lexical item)^{iv} に置かれる。これをニュートラルトニシティ^v というが、最後のレキシカルアイテムに核が置かれないものをマークトニシティ^{vi} という。話者は、発話のどの部分を特に伝えたいのかということにより、核の位置を決定している。次の発話を見てみる。

(2a) I have been asking for ages

(2b) I have been asking for ages

(2c) I have been asking for ages

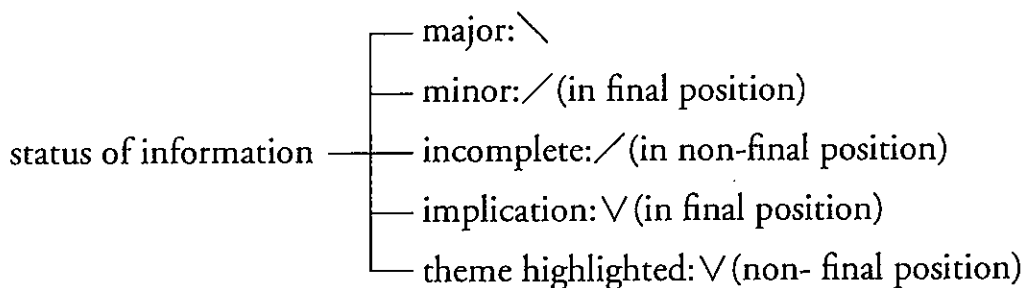
(Tench, 1996: 61)

(2a) はニュートラルトニシティで、意味は「私は年齢を訊いていたんです」となる。このとき、この発話はまったく新しい、新情報である可能性が高い。(2b), (2c) はともにグラマティカルアイテム^{vii} に核が置かれたマークトニシティである。こうした場合、核以外の情報は既に話題になった、旧情報であることが多い。(2b) は *haven't* ではなく *have* であると言いたいために *have* に核が置かれたもので、意味は、「私は年齢を（訊かなかったのではなく）訊いていたんです」となる。年齢については既に話題になった上で、訊いたのか、訊かなかったのかということを話者は伝えようとしている発話であることがわかる。(2c) は *been* に核を置くことによって時制を強調した発話になっている。意味は、「私は年齢を（今ではなく過去において）訊いていたんです」となる。年齢を訊いたことは既に話題になった上で、いつ訊いたのかを伝えようとした発話になっている。このように、話者は核の場所を変えることによって、情報の操作をする。

2.4 トーンズによって表される情報

トーンズはどのような音調を使うのかということである。Tench (1996) は音調の種類をまず大きく第一次音調と第二次音調とに分けている。第一次音調 (primary tones) は核音節で起こるもので、下降調, 上昇調, 下降上昇調の3つであるとしている。これら3つの音調は、発話の意味に関わるものであるとされている。それに対し、第二次音調 (secondary tones) は、音調の変化の度合いや、核音節以外 (前頭部, 頭部) での音調の変化であるとしている。例えば、低下降調, 高下降調などは第二次音調となる。第二次音調には音調の変化の度合いを変えることによって、心的態度を示す機能があるとされている。平坦調に関してはその音調の存在を認めてはいるものの、意味は上昇調と変わらないということから、上昇調の一変種として捉えている。本稿では、第一次音調のみを扱うこととする。

Tench (1996) は第一次音調である3つの音調が現れる位置によって、その音調がどういった情報を示すのかということ述べている。下降調は主情報 (major information) であるとしている。上昇調は発話の途中で現れた場合には、未完 (incomplete), 発話の最後の場合には副情報 (minor information) であるとしている。下降上昇調は発話の途中で現れた場合にはテーマを目立たせ (theme highlighted), 発話の最後では含み (implication) という位置付けをしている。([\] は下降調, [/] は上昇調, [V] は下降上昇調を示す)



(Tench, 1996: 86)

下降上昇調に関して、発話の最後では含みの意味があるということであるが、この含みという言葉はかなり広い意味で使用されている。Halliday (1967) はこの音調について保留 (reservation), 対照 (contrast), 聞き手に考えを求める個人的意見 (personal opinion offered for consideration), 譲歩 (concession) といった意味も含むとしている。

2.5 トーンズによって表されるドミナンス・デファランス

トーンズは情報を表すだけでなく、話者が聞き手に対して、何かを述べているのか、訊ねているのか、依頼しているのかというようなことも表している。下降調は話者が何かを知っている時や、何かを述べている時や、自分の感じたことを話す時に使われる。上昇調は話者が知らない、確信がないので聞きたい場合に使用される音調である。この際、話者は聞き手に対して何らかの決定をゆだねている時で、聞き手主体の音調であるといえる。それに対して下降調は話者主体の音調であるといえる。このようなことから、Tench (1996) は下降調を支配、優位、話者主体を示すドミナンス (dominance) の音調、上昇調を服従、敬意、聞き手主体を示すデファランス (deference) の音調であるとした。

3. 分析・解釈

3.1 分析・解釈の方法

分析する音声はイギリス英会話の教材からとったものを使用する。分析する会話は、1~2分程度のもので、会話の種類はインタビュー、議論、道を尋ねるもの、友人同士の会話の4つである。分析の手順としては、上記で述べた Tench (1996) の理論に沿い、トナリティ、トニシティ、トーンズを中心とする。2.1 に従って音調群の境界を定め、核の位置を見つけ、その

核音節で音調が下降か、上昇か、下降上昇かを聴き取る。音調に関しては、意味の違いが明確である第一次音調までの分析にとどめておく。平坦調が現れた場合には、[-] の記号を使用し、上昇調の一変種として解釈することとする。また核音節以外で音調変化が現れた場合には、記録として音調の記号を該当の音節の前に記しておき、アンダーラインは引かずに核音節と区別する。分析後、現れた現象に関して Tench (1996) の理論に沿って解釈をし、会話の中で話者がどのように情報の処理をしているのかを見ていく。分析結果は資料として最後に添付しておく。

3.2 解釈

ここでは分析結果をもとに、解釈をしていく。それぞれの会話において、とくにイントネーションによる情報の操作が見られたところの解釈を示す。解釈しきれなかったものについても最後に示しておく。

3.2.1 インタビュー

この会話は図書館員にインタビューしているものである。以下に、一部解釈したものを示す。

I: | And have you been based / here | all that / time? |

L: | You mean did I have my \ glory days | at some metropolitan \ super-
library? | \ Sorry, no. | I've been here in this little local library for all that
\ time. | I started / here, | and no / doubt | I shall \ finish here. |

まずインタビュアーが「ここで、ずっと働いているのですか。」と質問し、図書館員が答えているところである。図書館員が *Sorry, no.* や *I've been here in this little local library for all that time.* や *I shall finish here.* を下降調で発話していることから、断定的な、ドミナンスの発話をしていることがわかる。

また、図書館員は *at some metropolitan super-library?* で *super* に核を置き、下降上昇調を使用することによってこの発話に何らかの含みをもたせている。図書館員は図書館の大きさを意識していることがうかがえる。

I: | Though I am sure to √ many people | the job of librarian \ sounds | like a very \ tedious \ job. | Checking books / out, | checking them in / again, and then just | \ shelving them again. |

L: | Maybe it \ is | like that in a √ large library. | But you see, in a \ small library like this | we have very \ limited staff, | so \ everyone gets involved in \ all aspects | of running the \ library. | That can be \ very interesting. | And √ also, | we get to \ know people. |

インタビュアーはまず、*Though I am sure to many people* で *many* に核を置き、下降上昇調で発話している。発話の途中での下降上昇調であることから、「多くの人」というテーマを示したものと考えられる。後半の3つのイントネーション単位では列挙が見られた。それに対して図書館員は、*Maybe it is like that in a large library* を2つのイントネーション単位で発話している。*Maybe it is* を下降調で発話し、インタビュアーの意見を認め、*like that in a large library* の *large* に核を置き、下降上昇調で発話することで含みを持たせている。「大きな図書館ではそうでしょう（でもここは違うのよ）」といった意味になるだろう。その後の *But you see, in a small library* では *small* に核が置かれており、前のイントネーション単位での *large* と対になっているものと思われる。その後の音調はほとんどが下降調であり、図書館員が自分主体のドミナンスの発話をしている。最後から2つ目の *And also*、での下降上昇調は発話の途中であるため、テーマであろう。

この会話はインタビューであるため、知らない人同士によるものであった。この中で、インタビューを受ける側の図書館員にはドミナンスの発話が多くあった。言葉からも怒っているような発言や、自分が小さな図書館で働いていることに誇りをもっている発言があった。また、トニシティに

より、図書館の大きさに焦点が当てられるところもいくつかあり、図書館の大きさを意識していることがうかがえた。

3.2.2 議論

この会話は友人同士が言い合いをしているものである。一部解釈したところを見ていく。

A:| That's not what you said last / month? | ∨ You said, | and I / quote, |
that you were "coming along at a \ roaring pace". |

B:| \ Surely not! | I don't remember / that. |

A:| Well ∨ I do. | Quite \ clearly. |

初めのAの発話での2つ目のイントネーション単位では *You* に核が置かれ、下降上昇調で発話されていた。*You* を際立たせ、下降上昇調を使用することでテーマを示し、「(まぎれもなく) あなたが言ったのは」といった内容を伝えているものと思われる。それに対し、Bは *Surely not!* を下降調で発話し、ドミナンスとなっている。その後の *I don't remember that.* では上昇調が使用されている。ここでどう解釈するかであるが、発話の最後の上昇調は副情報ともいえるが、この発話は、前の強い否定から見ても、Aに対する反駁のデファレンスの発話と見たほうがよいだろう^{viii}。Bの反論を受けて、Aは *Well I do.* という発話で *I* に核を置き、下降上昇調で発話している。Aは *I* を際立たせ、含みをもたせることで、「(あなたは覚えてなくても) わたしは覚えているわよ」といった内容をBに伝えている。そのあと「かなりはっきりとね」という発話を付加している。この続きが次の会話である。

B:| Well I must have been \ mistaken - then, | because I wasn't getting
much better at \ all. | I suppose I'm just bad at \ languages. |

A:| You certainly are bad at keeping ∨ up with languages. | “∖ Roaringly bad”. |

B:| ∖ Maybe. | But it's not just ∨ me you know. | / English / people are / generally / bad at ∖ languages. |

初めの話者 B の「僕は、語学が苦手なんだと思うよ。」という発話を受けて、話者 A は *up* に核を置き、下降上昇調を使用して *You certainly are bad at keeping up with languages.* と発話している。話者 A は *up* を際立たせ、含みをもたせることで、「あなたは多分、(語学が苦手というのではなく) 続けることが苦手なのよね。」という内容を伝え、さらに次のイントネーション単位で「それもすごく苦手なのよ。」と付加し、反論しているのである。その後、B は「多分ね。」と認めながら、次のイントネーション単位で *But it's not just me you know.* を *me* に核を置き、下降上昇調で含みをもたせて反論している。「でもそれは僕に限ったことじゃないだろう (だって...)。」といった内容になるだろう。その次の *English people are generally bad at languages.* では、*English, people, generally, bad, languages* にそれぞれはっきりとした音調の変化が生じていた。核といえるのは、最後のレキシカルアイテムであり、下降調でもある *languages* であろう。こうした音調変化を Tench (1996) は第二次音調として捉えており、本稿で扱う範囲外の内容であるため、ここでの解釈は避ける。次の会話ではドミナンスが多く見られた。

B:| It's not an / excuse, | it's a ∖ reason. | It's ∖ different. | English people are bad at ∖ languages, | and I'm ∖ English, | so I was wasting my / time | / trying to ∖ learn. |

A:| That's ∖ rubbish. | ∖ Anyone can learn if they want to. | You just have to keep ∖ at it. | Put some ∖ hours in. | It's ∖ no good | just ∖ blaming it| on being ∨ English. |

B:| Well that's easy for ∖ you to say. | What languages do you ∖ speak? |

A:| ∖ None ∖ actually. | But that's not the ∖ point. | We're talking about

your \ French. | I didn't say ∨ I was trying to learn. |

話者 B の「イギリス人は語学が苦手なのさ。そして僕はイギリス人なんだ。だから僕は語学を習おうとして時間を無駄にしていたんだよ。」という発言に対して、話者 A は *Anyone* に核を置き、下降調で *Anyone can learn if they want to.* を発話した。*Anyone* を際立たせて、「(イギリス人でも) 誰でも、やりたければ習えるわよ」という意味の発言をしている。その後のイントネーション単位で「続けなければいけないわ」、「何時間かやるのよ」ドミナンスの発話を続け、最後に含みの下降上昇調を使用していた。これは Halliday (1967) のいう聞き手に考えを求める個人的意見という意味であると解釈できる。この A の発言を受けて、B は *you* に核を置いて *Well that's easy for you to say.* と発言した。話者 B は *you* を際立たせることにより、その発話に、「君が言うのは簡単だろうさ (僕じゃないんだから)」といった意味を持たせている。そして、「じゃあ君は、どの言葉を話すのさ」と A に訊いている。それに対して A は最後に *I didn't say I was trying to learn.* の 2 つ目の *I* に核を置いて下降上昇調で発話した。この場合の下降上昇調はここを際立たせることにより、「わたしは (あなたと違って) 習おうなんていってないわ」という意味の発言をしている。ここでの発話の多くは下降調であった。A も B もドミナンスの発話をすることで、自分の考えを言い合っていた。

この会話では、全体的にマクトトニシティが多く、話者は自分の伝えたい情報に焦点を当てていた。音調に関しては、下降調が多く、自分を主体として話す、ドミナンスの発話がお互いに多く見られた。

3.2.3 道を尋ねる

この会話は、通りがかりの人に、博物館までの道のりを尋ねる、知らない人同士の会話である。

A: | ∨ Excuse me. | I wonder if you could tell me how to get to the \ museum, please? |

B: | I ∨ might be able to. | It depends which \ museum | you want \ go to? |

A の初めのイントネーション単位での下降上昇調は相手の注意を引くための含みの一種であるといわれているものである^{ix}。「博物館を探している」という A に対して、B は *I might be able to.* の *might* に核を置き、下降上昇調で発話している。B は、*might* に核を置くことで、「多分」ということを強調し、さらに下降上昇調を使うことによって含みをもたせている。「多分できると思いますが（でも…）」といった意味になるだろう。そして、その理由となるであろう、次の「どの博物館かによりますね。あなたの行きたいのが。」という発話につながっている。

B: | There's at least \ three | that ∨ I know of. | Err. There's the local ∨ history museum, | there's the ∨ Castle Museum, of course, | and there's \ another one, | the Trinity \ Lane Museum, | I \ think. |

A が「博物館はいくつもあるのですか。」という質問に対しての答えの発話で、*There's at least three that I know of.* を2つのイントネーション単位で発話しているものである。「少なくとも3つあるんです」ということと、「私の知っている限りでは」という2つの情報を伝えている。*There's at least three* では、*three* に核があり下降調で発話している。この場合の下降調は主情報と捉えてよいだろう。その次の *that I know of* では、*I* に核があり、下降上昇調の発話になっている。*I* に核を置き、下降上昇調で話すことで、「私の知る限りでは（他の人は知らないが）…」といった意味を持たせているものと解釈できる。次の2つのイントネーション単位では *history*, *Castle* それぞれに下降上昇調が現れている。これらの下降上昇調は対照であると考えられる。

- A: | Ah. I think it's the \ Castle Museum that I'm looking for. |
 B: | \ Hmm. | That's a bit \ difficult from here. | The \ Castle. | / OK. |
 \ Right | do you know where the London \ Hotel is? |
 A: | I'm \ sorry, | I \ don't. | I don't know \ anything here | at \ all. |
 B: | I / see. | \ All right then. | You see that road leading up \ there? |
 A: | / Yes. |

Aの「わたしが探しているのは Castle Museum です。」という発話を受けて Bが発話している場面である。ここで、Bは *That's a bit difficult from here.* の *difficult* に焦点を当て「ここからだ少し難しいですね。」と言った後、*The Castle.*, *OK.*, *Right* の3つのイントネーション単位を下降調、上昇調、下降調と交互に発話している。このことにより、Bが、*The Castle* では「城」ということを自分の中で確認し、*OK* ではまだ考えをまとめており、*Right* で考えがまとまったのだと解釈できる。考えがまとまり、「London Hotel の場所は知っていますか。」と A に訊いている。それに対する A の答えは4つのイントネーション単位から成り、すべて下降調である。*I'm sorry, I don't.* を2つのイントネーション単位で発話することで、謝罪の意と、知らないという2つの情報を B に伝えているものと解釈できる。その後、*I don't know anything here at all.* を2つのイントネーション単位で発話している。2つの情報として発話することで、B に対し、この辺の地理についてまったく知らないということを述べている。この発話を受けて、B が *I see.* を上昇調で発話している。これも前の発話の *OK* と同様に考えをまとめているところであると解釈できる。*All right then.* で考えがまとまったものと見てよいただろう。*You see that road leading up there?* では *there* で下降上昇調を使用している。ここは、前に述べた、Halliday (1967) の下降上昇調の意味の1つである譲歩であると解釈できる。A の「この辺のことは何も知らないんです。」という発言に対して、「これならわかるだろう」という譲歩したかたちの発話であると解釈できる。「(じゃあ) あそこの坂になった道ならわかりますか。」といった意味になるだろう。それに対して A が続きを促すデ

フランスで *Yes*. と発話している。

この後の発話では、A が続きを促すフランスの発話以外、すべて下降調で発話されていた。最後の A の発話は次のようなもので、マークトニシテイであった。

A: | You were a \ great help. | Thank you \ very much. |

A は *great* と *very* に焦点を移すことにより、B に対して深い感謝の意を表しているのだと解釈できよう。

3.2.4 友人同士の会話

この会話は、話者 A がリラックスできるいい公園がないか話者 B に尋ねるものである。友人同士の会話である。

J: | / Relax? | Just lie on the - grass, | read a - book, | maybe have a small / picnic, | maybe a bottle of / beer. | \ Nothing \ special. |

A: | Ah, \ OK then. | I know just the \ place. | “Forest Green \ Park”. | It has a miniature / lake, | a big open grassy - area, | and \ trees for shade. | It’s very \ nice. |

J: | It \ sounds nice. | Where \ is it? | How do I \ get there? |

リラックスできる公園を探している J に、A が「どんなふうにリラックスしたいの。」と訊いたことに対する J の発話で、*Just lie on the grass, read a book, maybe have a small picnic, maybe a bottle of beer.* を4つのイントネーション単位で発話し、*grass, book* を平坦調で、*picnic, beer* を上昇調で発話している。平坦調は上昇調の一変種であると考えれば、この発話は列挙であると考えることができる。最後の *beer* は後に、発話が続いていることから、未完の上昇調であると解釈できる。この発話に対する A の答えでも、*It has*

a miniature lake, a big open grassy area, and trees for shade. で平坦調と上昇調の列挙が見られた。これは3つのイントネーション単位から成り、*lake* に上昇調、*area* に平坦調、*tree* に下降調が生じている。ここの *tree* はマークトトニシティであるが、この会話が公園でリラックスするというトピックであるため、木といえば日陰ということが当たり前のようになっていることから *tree* に核が置かれたものであると解釈できる^x。これに対し、*It sounds nice.* を *sounds* に核を置いて下降上昇調で発話している。「それはよさそうだね。(でも…)」というように含みのある発話になっている。その後、公園の場所や行き方を訊く発話につながっている。

4. 結論

今回、会話を分析し、話者同士のやりとりの中でイントネーションの現象を見ながら解釈してきた。

トナリティに関しては、話者が相手に情報を一つひとつわかりやすく伝えるためにイントネーション単位を区切り、伝えたい情報を処理していた。列挙の発話の時には、イントネーション単位を列挙される項目ごとに細かく分け、情報をわかりやすくしていた。また、情報の新旧にも関わることがあり、1つのイントネーション単位の中に2つ以上の節があるマークトトナリティでは、1つの節が新情報であり、あとの節は旧情報であった。これは、通常、1つのイントネーション単位に1つの情報が含まれるという Tench (1996) の理論のとおりであり、伝えたい情報を分けることにトナリティが関わっているということがわかった。

トニシティは、イントネーション単位内での情報の処理に深く関わっていた。どの会話でも会話が進むにつれてマークトトニシティが増えた。これは会話が進むことで旧情報が増えたことが原因であろう。また、インタビューでの図書館員の発話のように、一定の長さの会話の中で、話者がどのようなことを意識して発話しているのかということが、トニシティによ

ってわかる例もあった。

トーンズにおいては、ドミナンス、デファランスの音調がよく現れた。特に、議論では、ドミナンスと解釈できる音調が多くあった。お互いの意見を言い合う場面が中心であるためであろう。また、道を訊ねる会話や、友人同士の会話では、内容が、道順に関するものであったため、主情報としての下降調が多く見られた。

会話の中で、イントネーションは話者が伝えたい情報を処理するという大切な役割があるということがわかった。さらに、トーンズは話者間のやりとりの中では、含みを持たせたり、ドミナンスやデファランスなどの意思伝達に関してとても重要な役割を担っているということがわかった。

今回の分析では、平坦調が多く見られた。この平坦調に関しては Tench (1996) では上昇調と文法的な意味の違いはないとして、本稿においても上昇調の一変種であるとしていたが、今回の分析ではかなり多くの平坦調が現れていた。Roach (2000) は音調の種類を下降調、上昇調、下降上昇調、平坦調、上昇下降調の 5 つとしている。ただ、Tench (1996) の場合には文法的意味の違いがあるということに基づいて音調の種類を決定しているが、Roach は心的態度も考慮に入れているということで音調を分ける方法が異なっている。Roach (2000) の挙げた 5 つの音調は、未だ体系付けられていない心的態度を考慮に入れている分、微妙な部分があるといえる。しかし、今回、解釈の際に上昇調と捉えて問題はなかったが、実際に多くの平坦調が確認された。今後、心的態度に関する音調の体系化が進んだ際には、平坦調も独立した音調として捉えられるかもしれない。また、発話の最後の下降上昇調に関しては、含みといってもかなり広い意味があり、解釈の際にも困難なことがあった。Halliday (1967) が含みの中に入れている、保留、対照、聞き手に考えを求める個人的意見、譲歩という意味は含みとひとことというには広すぎるように思える。この下降上昇調という現象に関して、今後あらたなアプローチや、意味付けがなされるのではないだろうか。

注

- i Tench は音調群について次の 4 つの発話例をもとに表で説明している。下線は核音節を、単語の左についている ['] は強勢を、[|] は音調群の境界を示している。

1. A ' dog is a | man's | best | friend
2. | Dogs are | men's | best | friends
3. | Dogs are | men's | best | friends
4. | yes | they | are | | aren't they

	pre-head	head	tonic/ nucleus	tail
1	A	' dog is a man's best	<u>friend</u>	
2		Dogs are men's best	<u>friends</u>	
3			<u>Dogs</u>	are men's best friends
4-1			<u>yes</u>	
4-2	they		<u>are</u>	
4-3			<u>aren't</u>	they

(Tench, 1996: 14)

- ii ニュートラルトナリテイのニュートラル (neutral) という言葉はここでは「普通」のという意味で使用している。マークト (marked) と対立する言葉である。トニシティでも同様。
- iii マークト (marked) とは「有標」のことである。本稿ではニュートラルと対立させて使用している。トニシティでも同様。
- iv レキシカルアイテム (lexical item) は「語彙項目」のことをいうが、Halliday (1967) は語彙項目について yesterday/today/tonight 等を語彙項目には含めずに、グラマティカルアイテム (grammatical item), つまり「文法項目」に含めている。しかし, yesterday/ today/ tonight 等は普通 lexical item に含まれるものである。ここでは yesterday/today/tonight 等はグラマティカルアイテムに含めることにする。そのため, 本稿では語彙項目という訳語を使用せずに, カタカナ表記を使用することとする。
- v 注 ii 参照。
- vi 注 iii 参照。
- vii 注 iv でも触れているが, ここでは yesterday/today/tonight 等がグラマティカルアイテムに含まれるため, 一般的な文法項目と区別するためにカタカナ表記を使用している。
- viii Tench (1996) は, 反駁を次の発話を例に説明している。

Oh no I / didn't (Tench, 1996: 93)

この発話では「わたしは（そんなこと）してませんよ」といった意味になり、聞き手に訴えかける発話になっている。相手に考え直してほしいという願いが含まれた発話なので、デファランスであるといえるとしている。

ix 他に、∨ Waiter. や ∨ Nurse. もこの種の音調である。(Tench, 1996: 104)

x Tench (1996) は日常的に使われる例として次のような発話を挙げている。

The doctor's coming (Tench, 1996: 64)

この発話では、呼んだ医者がかかるのは予測できることであるため、coming は重要視されていないのである。

分析資料

(インタビュー)

I: | Perhaps I could \ start | with asking how long you have been \ working as a librarian? |

L: | Perhaps you \ could. | Let me \ see. | \ Goodness, | it must be almost / twenty / five ∨ years now. |

I: | And have you been based / here | all that / time? |

L: | You mean did I have my \ glory days | at some metropolitan ∨ super-library? | \ Sorry, no. | I've been here in this little local library for all that \ time. | I started / here, | and no / doubt | I shall \ finish here. |

I: | \ Sorry. | You sound \ proud | of your \ work? |

L: | Of \ course. |

I: | Though I am sure to ∨ many people | the job of librarian \ sounds | like a very \ tedious \ job. | Checking books / out, | checking them in / again, and then just | \ shelving them again. |

L: | Maybe it \ is | like that in a ∨ large library. | But you see, in a \ small library like this | we have very \ limited staff, | so \ everyone gets involved in \ all aspects | of running the \ library. | That can be \ very interesting. | And ∨ also, | we get to \ know people. |

I: | / Perhaps | you could tell me something about the day to day \ running of a library? | What has been the most \ interesting for you? |

L: | \ Hmm. | Well it is difficult to put your \ finger on | just one, ∨ single point. | But I \ would say | that the \ book choosing is | what I've \ enjoyed the most. |

I: | The / book choosing? |

L: | That's \ right. | You see, a \ small library like this | only has a very limited

\ budget. | So we can \ only buy a \ limited number of \ books. | It's not so much what you \ do buy that is interesting, | as what you \ don't buy. |

I: | Could you \ expand on that a little? |

L: | \ I could. | You - see, | I personally have a \ strong dislike for censorship, | for \ banning books. | But you - see, | every time you \ don't buy a book, | you are in \ effect, | performing a kind of \ censorship. | For - example, | in \ our library, | although we have no policy \ against it, | we have no \ erotica | in a whole \ collection. | \ Strange, | don't you \ think? |

I: | I suppose you have to consider your reader's \ preferences. |

L: | We \ do, | of \ course. | But then, for \ many people, | what books a library \ holds, | \ very much influences peoples' \ choices. | Of course, it's \ changing now. | Books are so much more \ available these days. | But the \ public library | still has a \ very \ powerful \ effect | on people's \ reading. |

(議論)

A: | Are you still taking \ French | at \ Evening Class? |

B: | \ No, | I gave \ up. |

A: | Whatever \ for? | You were so \ keen before. |

B: | \ I know, | but I had to miss a couple of \ classes, | and after you \ miss, | it's so difficult to go \ back. | And \ anyway, | I wasn't getting any \ better, | so it was all a bit of a waste of \ time. |

A: | That's not what you said last \ month? | \ You said, | and I \ quote, | that you were "coming along at a \ roaring pace". |

B: | \ Surely not! | I don't remember \ that. |

A: | Well \ I do. | Quite \ clearly. |

B: | Well I must have been \ mistaken - then, | because I wasn't getting much better at \ all. | I suppose I'm just bad at \ languages. |

A: | You certainly are bad at keeping \ up with languages. | "\ Roaringly bad". |

B: | \ Maybe. | But it's not just \ me you know. | \ English \ people are \ generally \ bad at \ languages. |

A: | You mean English people are bad at keeping \ up with languages. | But I \ know what you mean. | I - mean, | it \ must be a cultural thing. | It's nothing \ genetic. | It's not any kind of in-born \ inability. |

B: | \ No, | I suppose \ not. | But you would almost think it \ was, | looking at how \ bad people are. | I - mean, | do you \ know | \ anyone | who is \ good at languages? |

- A: | Actually, \ yes, | I \ do know | a \ few people. |
 B: | You mean \ only a few people. |
 A: | \ Perhaps. | But I \ don't see | how this becomes an excuse for you giving up
 \ French. |
 B: | It's not an \ excuse, | it's a \ reason. | It's \ different. | / English / people are
 / bad at \ languages, | and I'm \ English, | so I was wasting my / time / trying
 to \ learn. |
 A: | That's \ rubbish. | \ Anyone can learn if they want to. | You just have to keep \ at
 it. | Put some \ hours in. | It's \ no good | just \ blaming it | on being \ English. |
 B: | Well that's easy for \ you to say. | What languages do you \ speak? |
 A: | \ None \ actually. | But that's not the \ point. | We're talking about your
 \ French. | I didn't say \ I was trying to learn. |

(道を訊ねる)

- A: | \ Excuse me. | I wonder if you could tell me how to get to the \ museum, please? |
 B: | I \ might be able to. | It depends which \ museum | you want \ go to? |
 A: | There's more than / one? |
 B: | There's at least \ three | that \ I know of. | Err. There's the local \ history museum,
 | there's the \ Castle Museum, of course, | and there's \ another one, | the Trinity
 \ Lane Museum, | I \ think. |
 A: | Ah. I think it's the \ Castle Museum that I'm looking for. |
 B: | \ Hmm. | That's a bit \ difficult from here. | The \ Castle. | / OK. | \ Right
 | do you know where the London \ Hotel is? |
 A: | I'm \ sorry, | I \ don't. | I don't know \ anything here | at \ all. |
 B: | I / see. | \ All right then. | You see that road leading up \ there? |
 A: | / Yes. |
 B: | \ Follow that | until you get to the top of the \ hill, | and you'll see a large
 \ department store. |
 A: | / OK. |
 B: | That gets you close to the \ Castle, | but it's a bit \ complicated | after \ that. | I
 think it's probably best if you ask \ again | at the \ department store. |
 A: | \ Oh, | I \ see. | I'll \ try that. | \ Thank you. |
 B: | \ That's OK. | Sorry I couldn't be more \ help. |
 A: | You were a \ great help. | Thank you \ very much. |

(友人同士の会話)

James: | I want to find a nice \ park, | somewhere not too far \ away. | Somewhere where I can be quiet, and \ relax. | Do you have any \ ideas? |

Alex: | \ Well, | what kind of thing are you \ looking for? | How do you like to \ relax? |

J: | / Relax? | Just lie on the — grass, | read a — book, | maybe have a small / picnic, | maybe a bottle of / beer. | \ Nothing \ special. |

A: | \ Ah, | \ OK then. | I know just the \ place. | “Forest Green \ Park”. | It has a miniature / lake, | a big open grassy — area, | and \ trees for shade. | It’s very \ nice. |

J: | It \ sounds nice. | Where \ is it? | How do I \ get there? |

A: | \ OK. | It takes about twenty \ minutes | from Central \ Station. | You get \ off | at Forest Green \ Park Station. | That’s \ easy to / remember. | You go out onto the \ main street, | turn / left, | and follow the road for about five \ minutes. | You’ll pass a fire station on your — left, | and a school on your \ right, | and you’ll find the south gate to the — park | just after the \ school. | \ Oh, | and you can \ buy a packed lunch or sandwiches | at a \ bakery | just opposite the Park \ gate. | So you don’t need to take your own \ picnic. |

J: | \ OK. | It sounds easy to \ find. |

A: | It \ is. | \ Very easy. | \ Especially | if I go \ with you. |

参考文献

- Brazil, D. (1997). *The communicative value of intonation in English*. Cambridge: CUP.
- Brazil, D., Coulthard, M. and Johns, C. (1980). *Discourse Intonation and Language Teaching*. London: Longman.
- Brown, G. (1990). *Listening to Spoken English*. 2nd edn. London: Longman.
- Brown, G. and Yule, G. (1983). *Discourse Analysis*. Cambridge: CUP.
- Cruttenden, A. (2001). *Gimson’s Pronunciation of English*. 6th edn. / Revised by A. Cruttenden. London: Edward Arnold.
- Cruttenden, A. (1997). *Intonation*. 2nd edn. Cambridge: CUP.
- Crystal, D. (1969). *Prosodic Systems and Intonation in English*. Cambridge: CUP.
- Halliday, M. A. K. (1967). *Intonation and Grammar in British English*. The Hague: Mouton.
- Halliday, M. A. K. (1970). *A Course in Spoken English: Intonation*. London: Oxford UP.
- Halliday, M. A. K. (1994). *An Introduction to Functional Grammar*. 2nd edn. London: Edward Arnold.
- Ladd, D. R. (1980). *The Structure of Intonational Meaning*. Bloomington: Indiana UP.

O'Connor, J. D. and Arnold, G. F. (1961). *Intonation of Colloquial English* (2nd edn. 1973). London: Longman.

(片山嘉雄, 長瀬慶来, 長瀬恵美 共編訳 (1994). 『イギリス英語のイントネーション』. 南雲堂.)

Pike, K. L. (1945). *The Intonation of American English*. Ann Arbor: University of Michigan Press.

Roach, P. (2000). *English Phonetics and Phonology*. 3rd edn: Cambridge: CUP.

Tench, P. (1990). *The Roles of Intonation in English Discourse*. Frankfurt am Main: Peter Lang.

Tench, P. (1996). *The Intonation Systems of English*. London: Cassel

小林章夫, ドミニク・チャーナム (2001). 『イギリス英会話を愉しく学ぶ』. ベレ出版.